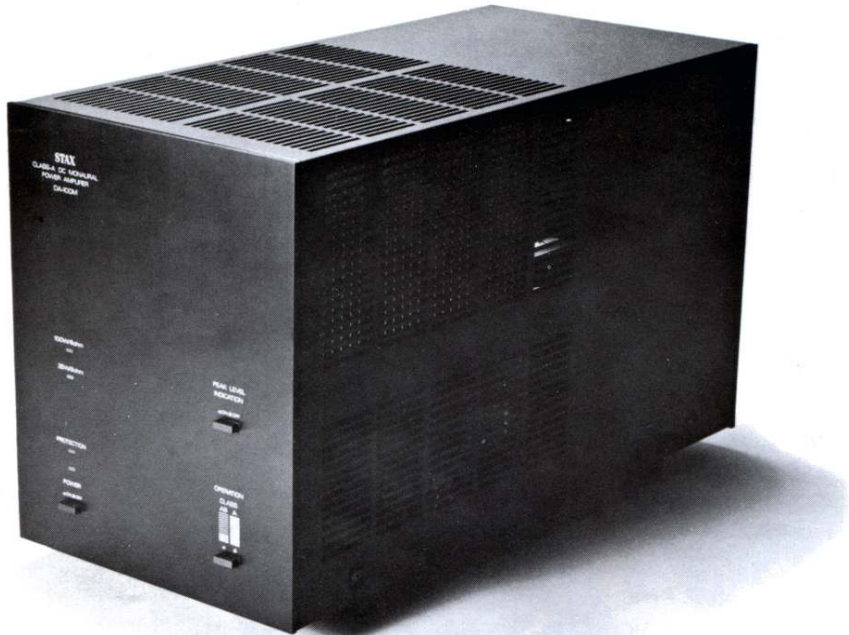
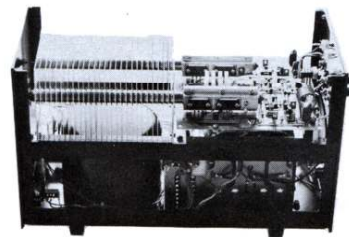


STAX power amplifier

DA-100M ¥230,000



回路方式	全段対アース増幅方式純A級モノラルDCアンプ
最大出力	100W(8Ω)A級動作、AB級動作時とも
周波数特性	DC~500kHz(+0~-3dB/1W出力時)
高調波歪率	0.0025%以下(10Hz~20kHz/10W出力時), 0.008%以下(10Hz~20kHz/0.03W~100W出力時)
S/N比	155dB以上(入力換算-126dB以下)
入力レベル	1.4V/100kΩ
インピーダンス	4Ω以上
負荷インピーダンス	500以上(1kHz)
ダンピングファクター	26dB
利得	100V/μS
スルーレート	100, 117, 220, 240V/AC50~60Hz
使用電源	370W(A級時), 220W(AB級時)
消費電力	200(W)×268(H)×433(D)mm
外形寸法	15kg
重量	A級100W/AB級100W(25WまでA級動作)切換え可能。
備考	入力ON-OFFスイッチ、サブソニックカット入力端子、DC保護回路、温度保護回路、ショート保護回路
附属品	ハイバスグラウンドケーブル



●いま、アンプの回路が大きく変わろうとしています。その第1号機がDA-100M。

これまでも“音を良くする回路テクニック”がいくつも提案されてきました。そしてその多くが確かに優れた成果をあげ、すでに常識的に使われている方法もあります。ところがそれらの方法の因果関係は問われもせず、解明されるわけでもなく習慣のようにそれこそきのうまで(!)使われていたわけです。いわく、スルーレートを高くする、低NFB化して裸特性を広帯域化する、高域まで低インピーダンスの電源を使う等々。これらのテクニックが実は電源ノイズを相対的に小さくするという方向にすべて位置づけられることがスタックスの検証によってあきらかになったのです。全段対アース増幅、これがその回路の名称です。従来(現在か?)最も一般的で代表的なアンプ回路を見直してみますとそのすべてが初段と終段は対アース増幅と言えるものの2段目に於て電源電圧を基準とする対電源増幅と言ったほうが適切と言える回路になっています。これが電源ノイズを信号に加算して終段に送り込むルートだったのです。特に超高域に於てはNFBとゲインの関係でノイズの増幅率のほうが信号の増幅率より大きくなってしまふという現象すら起っています。これが“電源回路を替えると音が変わる”と言われてきた大きな要因であったのです。

そこでこの2段目を純粋に“アースを基準とする増幅”つまり電源ノイズが理論的にも関与しない回路にすればよい、ことになります。その回路が全段対アース増幅というわけです。(PAT. PEND.)。この新回路に加えて、初段にスーパーシャント電源を配し、正統の純A級動作100W及び25Wまで純A級で最大出力100WのAB級動作切替え機能や信号経路にリレー等の音質を劣化させる接点が挿入されない3重の保護回路、音質に害のないアースケーブルなど、“スタックスの新製品”にふさわしい内容として“音”です。

アンプはブラインドテストでお選びください!